

『自発活動を育てる環境づくり』

——幼年期のオープン・ラーニングのために——』

バーバラ・デー著

教育出版

森上史郎・江波諄子共訳

ノースカロライナ大学のバーバラ・デーの「OPEN LEARNING IN EARLY CHILDHOOD」の訳本で、五歳から八歳までの子どものオープン学習を促す環境作りについて書かれたものである。全体は十三章から成っているが大きくは二つに分かれ、一章において、オープン学習を行なうにあたっての考え方が述べられ、二章以降はオープン学習の具体的な場面の作り方の例が、「積木」、「砂遊びと水遊び」、「戸外での遊び」、「芸術的創作活動」というような形で一章ごとに細かく取り上げられている。

オープン学習は、旧態の学校問題に対する疑問から、より効果のある、しかも楽しく、わくわくするような学習の為に環境作りを目指していく過程で考えられてきたようである。それは子どもに対して柔軟に教育のあり方を変えていく試みであり、一人／＼の子どもの興味や要求、課題意識・挑戦目標などを考えながら、子どもに即して環境・形態を変えていくこととするものである。しかしそれは一つの組織化されたパターンや特定の指導方法ではなく、むしろひとつの思想だという点、また基本に子どもの主体性を重

視するということを強調している。確かに、オープン学習というと、教室の壁が取り払われているとか、学年がないという形態面だけが強調されがちである。

さて具体的場面の作り方の例をいくつか紹介してみたい。「芸術的創造活動」の章の中に、足を使ったペインティングがある。これは雰囲気の違いをレコードをかけ、子どもが溶かした絵具を足の裏につけ、紙の上を歩いたり、つま先で歩いたりするわけである。これなどは日本人の足に対するイメージとか、比較的管理傾向の多い日本の幼児教育環境からは発見されにくい遊びではなからうか。もし試そうとすれば勇気がいりそうである。

次に「戸外での遊び」の章の中に生木を利用したり、製材された木材を使ったり、つまり木で作られた大きな教具をみる事が出来る。これらの教具は大きく

立体的で、色々活動的動きができると同時にこじんまりした動きもとれるようにもできている。例えば部屋や家として使うことができると同時に、すべり台として、鬼ごっこの障害物として、跳躍台等として使うこともできるのである。プラスチックや鉄製の教具が多い現在、たと

え子どもがそれらで遊んでいても何か教具と子どもとの間に距離を感じるのではあるが、木製の教具は一体感を感じさせるのである。次に、とっ組み合いというものがある。たまたま子ども達がつっ組み合いになったら私達はどうか対応するであろうか。「ヤメナサイ、」というであろうか。それとも怪我がない限り見ているであろうか、ここでは子ども達にスローモーションで戦わせてみることを勧めている。光景が目には浮ぶようである。

「ホームリビング」の章の中には裁縫・

料理がある。勿論子ども達ができる程度のものであるが、教師側にあらゆる面においての余裕がないとむづかしい感じ、十五人、二十人それ以上の子ども達に一人の教師が一斉に働きかける保育形態をもってしては不可能であろう。

特別目新しい教材・材料が紹介されているのではない。むしろ、どこかの会社が作ったものというのではなく親や教師が手作りで作り上げた物や日用品の利用が多く、大人と子どもと一緒に生活を経験し、作り上げ、その過程で多くのものを学んでいく様子がうかがえるのである。どちらかといえば幼児教育のみならず、教育というものが、大人側から一方的に子ども側へ教え込むという形でなされていくことの多い昨今、子どもの創造性を促し、自主性を重視したいと考える

時、むしろ教師側の自発性や創造性が問われていることに気付かされるのである。まずは教師側の閉鎖的、固定的考えをオープンにする必要があるであろう。また実に細かく、具体的に場面・環境作りが述べられているが、これらはいくまでも参考であり、子どもと出会った教師がいかにその子どもに合った教材を作り、それを利用し教育環境を作っていくことができるかが問題であろう。

最後にこの本の中で引用されているバーナード・スポデクの言葉より、

「それがどのように斬新なものであっても、その環境や組織・形態・方法などが固定化した時には、生命は失われ無意味なものになる」と。

現在の幼児教育界がまさに必要としている書物であると思う。

(日本総合愛育研究所 松沢孝博)